

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 藤原 克巳

本論文は、菅原道真の文学と事績を、彼が生きた9世紀の政治社会史と漢文学史との連関のなかに位置づけて徹底的に解明し、さらにそこから、平安朝漢文学全体を展望したものである。論文の構成は、9世紀という時代を、前近代の日本と中国の国家体制の展開を見通したパースペクティブのなかに定位して、論文全体の最も基本的な視座を提示した序論「前近代の日本と中国」をはじめとして、「Ⅰ嵯峨朝の漢文学」、「Ⅱ転換期としての承和期」、「Ⅲ菅原道真の詩と思想」、「Ⅳ平安朝漢文学の展望」の5部からなる。

「Ⅰ嵯峨朝の漢文学」では、空前の漢詩文隆盛を誇った嵯峨朝の漢文学について、詩人が政治の中枢に参画する政治家でもありえた幸福な時代状況を明らかにした上で、嵯峨朝を中心とする漢詩作品を具体的に分析し、その唯美主義と観念性が古今集歌風の基底をなしてゆくものであったことなど、嵯峨朝漢文学の特質と平安朝の文学史・文化史上の意義について論じている。「Ⅱ転換期としての承和期」では、前期撰関体制の形成に連なる承和以後の政治社会的環境の変化と、承和期の『白氏文集』の伝来が、王朝漢文学をいかに変容させたかを明らかにし、また白居易の諷諭詩と菅原道真の諷諭詩的作品について、両者の出身階層や社会的基盤の違いをも視野に入れて比較考察している。

「Ⅲ菅原道真の詩と思想」では、詩人無用論が横行する時代にあつて、あくまでも詩人と鴻儒とを兼ね備えた詩儒たらんとした道真の文学と事績を詳細に検討した上で、しかし彼の多感な風月の詩魂こそが、その独自の倫理性の源泉であったと論じている。またさらにその詩の表現を、白居易の詩とも比較しながら精細に分析し、繊細な直叙的表現と理知的な比喻表現との複雑な織り柄に道真の詩風の独自性があること、そしてその理知的な比喻表現は古今集歌風にも通ずるものであることを明らかにしている。

「Ⅳ平安朝漢文学の展望」は、上記の考察のなかで明らかになってきた問題、とりわけ平安朝漢文学における儒教の日本的特質や、王朝漢詩における「風月」の意義といった問題を軸にして道真以後の平安朝漢文学を展望し、最後に『源氏物語』における『白氏文集』の引用の分析を通して、王朝漢文学の遺産が中世に継承されてゆく様相を考察して本論文全体を締め括っている。

本論文は、日本史・中国史・中国文学・中国思想といった隣接領域にも果敢に踏み込んで、きわめてスケールの大きい立体的な文学史を構築するとともに、具体的な漢詩作品の細やかな味読と分析を通して、古今集歌風の形成をも視野に入れた王朝漢文学の表現史・精神史を織り成している。日本史学・中国史学等の隣接領域の最新の研究成果の摂取という点ではやや不安がなくもないが、本論の価値を損なうものではない。このように政治社会史をも織り込んだ巨視的な視点と、文人たちの内面に迫る細やかな表現分析を統合した平安朝漢文学史の構築はかつてなかったものであり、審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。